



## 「私たちが帰るところ」

～イエス様のプレゼント「平安」は父の懐～

「あなたがたに贈り物をあげましょう。あなたがたの思いと心を安らかにすること、それがわたしの贈り物です。わたしが与える平安は、この世のはかない平安とは比べものになりません。だから、どんな時にもおろおろしたり、恐れたりしてはいけません。」

ヨハネによる福音書14章27節 [リビングバイブル]

主が与えてくださっている平安は、「どんな時にもおろおろし」ないもの。また、「恐れたりし」ないもの。私たちの人生に全く戦いも試練も苦しみもないのならば、私たちの心はいつも平安であることができます。しかし、実際にはそれらは常にあるのです。この世の平安は本当に一時的なものであるので、問題が起ってしまったら、「はかない平安」としてすぐに消え去ってしまいます。本物ではないからです。しかし、パウロ自身も、また、このヨハネ福音書を書いたヨハネ自身も、自らの不完全さ、弱さを認識してはいましたが、それ以上に、神の偉大さ、愛の深さを体験していました。それは、困難に出会えば会うほど、金や銀が火で精錬されるように、さらに確かなものとして彼らの心を強め続けていきました。

先日吉次姉の信仰のように、彼女はALSという難病との壮絶な戦いの中で、一瞬の笑顔もあらわすことができないような状況の中でも、確実な神様の御手を感じていました。難病との大いなる闘いを通して彼女の信仰は純金のように精錬されていったのです。

私たちに与えられている信仰はそれほどまでに力強いものなのですが、私たちは戦いに慣れていないために、すぐに弱ってしまいます。本物を手に入れる前に、その時を通過してしまっています。もし、必死であるなら、もっともつ私たちは祈るでしょう。もっともつ教会を第一にするでしょう。もっともつ主を礼拝するでしょう。そうでないのは、それほど必死ではないからではないでしょうか。これは牧師であるわたしも同様です。危機感を意識していないからです。本当に生ぬるい自分自身が情けなく感じます。

しかし、この信仰の前提を前もって理解していれば、いざ人生の大嵐がやって来た時でも、踏ん張る力となると信じています。

教会は仲良しグループの集いではありません(もちろんそういう側面もありますが…)。もっとも大切なことは、創造主なる神への信仰をお互いに励まし合う所だと思っています。教会の交わりを通して、お互いの傷をなめ合うのではなく、主にある信仰とは何かを確認し、確固たる信仰を持ち続けるようにと励まし合うところではないでしょうか。

今週も私たち一人一人と共に歩んで下さる主を、生活の現場の中で体験し、勇気を与えられて、前進し続けることができるよう、共に祈り続けていきましょう！